

## 日本土壤肥料学雑誌（会誌）原稿執筆規程

（2014年10月一部改定）

1. 原稿は投稿規程に従い、ワープロソフトを用いて、A4判1ページ25行、1行26字、文字サイズ12ポイントで作成する。
2. 刷り上がりの1ページは、26字×25行の原稿4枚に相当する。原稿の1行は刷り上がり片段1行になる。図は縦5cmが刷り上がり10行に相当する。表の1行は本文の1行にほぼ等しい。英文要旨は300語の場合、刷り上がり約半ページに相当する。

### 表題・著者名・キーワード

3. 表題は内容を簡潔に表すものとし、○○の研究あるいは○○に関する研究、という表題は避ける。内容が密接に関連した複数の報文は、副題をつけた一組の原稿（例：○○モデルによる○○の解析 I. 理論, II. 数値例）として投稿することができる。これらの原稿は一括して審査され、それらのすべてが掲載受理となった後、同一号に掲載される。
4. 表題、著者名の順に記し、所属機関を脚注に記入する。所属機関は研究の行われた場所とし、現在の所属がこれと異なる時も脚注に記す。報文以外はすべて、英文の著者名、タイトルを脚注に記入する。E-mail アドレス掲載希望者は、アドレスを脚注に記載する。
5. 表題、著者名のあとに、1行あけて5語以内のキーワードを記す。

### 本 文

6. 本文はキーワードのあと、3行あけて書き起こす。
7. 見出し・小見出しの扱い方 文章は1, 2, 3 … (章), 1), 2), 3) … (節) のように分け、必要に応じて小見出しをつける。章・節の番号はアラビア数字を用いる。見出し・小見出しには行をあげない。
8. 文体 ひらがな漢字混じりの横書き口語文とし、できるだけわかりやすい表現にする。
9. 術語以外はなるべく常用漢字を用い、かなは現代かなづかいとする。
10. 英数字には半角文字を用いる。
11. 数字は一般にアラビア数字を用い、漢数字は普通の字句にのみ用い（例：二三の実例、十徳豆、農林10号、リン酸三カルシウム）、ローマ数字は番号を示す場合に限る。
12. 外国人名は欧文とする。ただし、中国人名などは漢字でもよい。特に必要のないかぎりロシア文字などは用いない。本文中の人名には敬称をつけない。なお、術語になっている外国人名はカタカナ書きとする（例：ケルダール法、ストックスの法則）。
13. 外国地名はカタカナを原則とするが、必要に応じて欧文を用いる。中国などの地名は漢字でもよい。日本の地名も読み方の周知されていないものはひらがなを併記す

る。

14. 量を表す文字はイタリック体にする (例:  $PV=nRT$ ).
15. 術語は原則として文部省編: 学術用語集ならびに『土壌・肥料・植物栄養学用語集』(養賢堂) による。普通用いられる外国語の術語, 物質名などはカタカナで書く。
16. 文章中においては, 物質名はなるべく化学式を用いないで名称を書く (例: HCl,  $C_2H_5OH$  と書かないで, 塩酸, エタノールと書く)。
17. 略字・略号を使うときは, 初めにそれが出る箇所で正式の名称とともに示す [例: ペンタクロルフェノール (PCP), アデノシン三リン酸 (ATP), 陽イオン交換容量 (CEC)].
18. 原則として, 動植物の名称はカタカナ書きにし, 最初の記載の場合にのみラテン語による学名を付す。学名はイタリック体にする。
19. 肥料成分等の表示は元素表示を原則とし, 必要に応じて酸化物表示を括弧内に併記する [例:  $10.0 \text{ kg-P ha}^{-1}$  ( $22.9 \text{ kg-P}_2\text{O}_5 \text{ ha}^{-1}$ )].
20. 数量の単位は原則として SI 単位とする。数値と単位の間には半角スペースを入れる。参考例を末尾に示す。時間は 13 時間 6 分のように書き, 時刻は 13 時 6 分または午後 1 時 6 分のように書く。
21. 学会の大会などで口頭発表したことなどは脚注にする。
22. 研究が官公庁, 財団, 企業などによる研究費補助金, 奨励金, 助成金などを受けて行われた場合には, その旨を脚注にする。
23. 感謝の言葉などは本文末尾につける。

#### 英文抄録原稿

24. 英文抄録原稿は, A4 判 1 ページ 25 行とし, 約 3 cm の余白を残して, 表題, 著者名 (フルネーム), 所属, 語数 300 字以内の英文要旨 (報文のみ) および 5 語以内のキーワード (資料では不要) を記入する。これらの英文表現は, 投稿前に専門家による校閲を受けておくことが望ましい。キーワードはアルファベット順に配列する。
25. 動植物名には, 最初の記載の場合にのみ, ラテン語による学名 (binomial または trinomial) を付する。
26. 土壌分類名には, FAO-UNESCO 方式あるいは USDA 方式のような, 国際的方式による分類名を併記することが望ましい。
27. 英文の記載方式に関するその他の事項については, 欧文誌 (Soil Science and Plant Nutrition) 投稿規程に従う。

#### 図 表

28. 表・図・写真などは必要最小限度とし, 同一内容を表と図に重複して示すことはできるだけ避ける。

29. 表・図・写真は本文と一つのファイルにまとめ、本文のあとに一覧を示した後、1 ページに一つずつ貼り付ける。査読の便宜を図るため、これらのページにも表・図・写真のタイトル・説明文を入れる。表・図・写真の挿入位置は、本文中欄外に指定する。ただし、指定の位置に入らないことがある。
30. 表はワープロソフトの作表罫線を使って作成する。表計算ソフトを使って作成し、オブジェクトとして貼り付けてもよい。空欄の多い表は避け、注を使うなどして紙面の節約を図る。
31. 図は、適当なソフトを使って作成し、オブジェクトとして貼り付ける。印刷に適しない図は作成し直しを要求される。
32. 図は刷り上がりの大きさを指定する(片段組みは横 84 mm, 全段組みは横 176 mm 以内とする)。作成にあたっては、掲載時の刷り上がりを考慮して図中の線の太さ、文字・数字の大きさを選ぶ。
33. 表の番号は「表 1」のようにし、タイトルは表の上に記入する。図または写真の番号は「図 3」、「写真 2」のようにし、タイトルは、図または写真の下に記入する。なお、凡例も原則として図、写真の下に記入し、見やすいものとする。
34. 地図には定尺をつけ、何万分の 1 などの縮尺を指定しない。顕微鏡写真などには定尺をつけ、何倍などの拡大率を指定しない。

#### 引用文献

35. 文献は本文のあとにまとめて著者名のアルファベット順に書く。本文中の引用箇所では、著者名のあとに発表年を括弧書きで添えるか [例：原・土屋 (2007) は…, Bertsch and Seaman (1999)によれば,…], 文章の途中または末尾に著者名と発表年を括弧書きで入れる [例：… が明らかにされている (Kookana *et al.*, 1994 ; 笛木ら, 2007)]. 特許は、発明者(あるいは出願人)(発行年)発明の名称, 特許文献の番号を記載する。未発表・未受理のもの、私信は引用文献としては記載しない。
36. 和文誌の略名は農学進歩年報の用例により、欧文誌の略記は *Chemical Abstracts* による。ただし、発行後日の浅いもの、土壌肥料分野になじみのうすいものは、適宜正式名を用いる。なお、本誌は土肥誌、講演要旨集は土肥要旨集とする。
37. 書き方の様式は次の例による。

##### 雑誌

藤川智紀・高松利恵子・中村真人・宮崎 毅 2007. 農地から大気への二酸化炭素ガス発生量の変動性とその評価. 土肥誌, 78, 487-495.

Panno, S.V., Hackley, K.C., Kelly, W.R., and Hwang, H.-H. 2006. Isotopic evidence of nitrate sources and denitrification in the Mississippi River, Illinois. *J. Environ. Qual.*, 35, 495-504.

##### 逐次刊行物

Dahlgren, R.A., Saigusa, M., and Ugolini, F.C. 2004. The nature, properties and

management of volcanic soils. *Adv. Agron.*, 82, 113–182.

単刊書の章

松森堅治 2005. 地理情報システムを用いた窒素負荷予測モデル. 波多野隆介・犬伏和之編続・環境負荷を予測する, p. 60-79. 博友社, 東京.

Roberts, D., Scheinost, A.C., and Sparks, D.L. 2003. Zinc speciation in contaminated soils combining direct and indirect characterization methods. *In* H.M. Selim and W.L. Kingery (ed.) *Geochemical and hydrological reactivity of heavy metals in soils*, p. 187–227. Lewis Publ., Boca Raton.

単刊書 (引用ページを示す場合)

西尾道徳 2005. 農業と環境汚染, p. 148. 農文協, 東京.

Kyuma, K. 2004. *Paddy soil science*, p. 66. Kyoto Univ. Press, Kyoto.

ウェブ情報

野菜茶業研究所 2006. 野菜の硝酸イオン低減化マニュアル.

<http://vegetea.naro.affrc.go.jp/joho/manual/shousan/index.html>

特許

鎌田淳・丸岡久仁雄・畑克利・浅野智孝・池田隆夫・東野信行・飯塚美由紀・富樫直人 2010. 有機肥料およびその製造方法, 特開 2010-241637(発明者が3名以上の場合は省略も可)

日本土壌肥料学会発行の雑誌で使用が推奨される単位の例 (別表)

付則：本規程は 2014 年 10 月 22 日以降に投稿された原稿に適用される。